



# あるはずの ないもの

6月23日

Sudden Fiction Project

高階 經啓  
hirotakashina

## 6月23日のおはなし「あるはずのないもの」

---

海蛇じいさんが行方不明になったとの知らせを受け、少女はじいさんの小屋に向かった。わたしなら何かわかるかもしれない。そう思ったからだ。わたしがじいさんの持ち物に手を触れれば、その時じいさんが何をしていたか、何を考えていたかわかるかもしれない。なかよしの海蛇じいさんを見つけるためなら、力を使い果たすことになってもいいと思っていた。

けれど駆けつけたとき、事態は全然そんな風ではないことがわかった。小屋があるべき場所に小屋はなく、小屋がないどころか、そこには一度も建物など建っていたことがないかのような空虚な草っ原が風に葉をそよがせているだけだった。数人の村人が小屋があったはずの場所を囲むように立ち尽くしていた。何をするでなく所在なげに立っていた。家そのものが消え失せていたのだ。触れるべきじいさんの持ち物もない。

「おう」

少女に声をかけてきたのは、海蛇じいさんの仕事仲間の夜釣だった。夜釣はじいさんよりも若かったが、呼び名の通り夜釣にかけては村で右に出る者がなく、じいさんもずいぶん信頼していた。だから年の差はあっても二人が友人同士と言っていいような付き合いをしていたことを少女も知っている。

「どうしたんですか？」

「見ての通りだ」

「まるで最初からじいさんちがなかったみたいだ」

割れるような大声でそう言ったのはムササビだ。ムササビがここにいることを少女は不思議に思った。ムササビは山男で、漁師の海蛇じいさんとはあまり接点がないはずだったからだ。けれどもその疑念はすぐに氷解した。大男のムササビの陰から顔をのぞかせた小さな男の子を見て少女は思い出した。ムササビの息子のモミは海蛇じいさんになついでいて、いつもよく遊びにきていた。

「モミが知らせてくれたんだ」

ムササビとモミを見つめて黙っている少女を見てどう思ったのか、夜釣が解説してくれた。

「そう」少女は言った。「モミが教えてくれたのね。いつ？」

「さっきだ」モミはきんきんする声で言った。「さっきここに来たらじいさんちがなかった」

「モミは昨日も遊びに来たの？」

「昨日は来なかった。一昨日なら来た。じいさんちはあった」

少女が振り向くと夜釣が補足した。

「昨日はおれも会ってない。一昨日の夜一緒に漁に出て、夜が明ける前、一緒に帰って来てそれ

きりだ」

「何かじいさんの持ち物ある？」

そう少女が言うと、夜釣は「あっ」というような顔つきをしてしばらく考えていたが、やがて「ある」と言った。

\* \* \*

夜釣が持ってきたのは一冊の本だった。春画が描かれた本で、それも遙か昔のものらしかった。紙ならとっくに朽ち果てているはずなのに、この本はほとんど傷んでいなかった。触るとどうやら紙のように見せかけた別な素材でできているらしかった。少女がページをめくりながら本を検分しているのを見て何を思ったか、夜釣が「その本はじいさんが『こういうのをよく見て勉強しろ』っておれに押し付けて」と言い始めた。

どうしたのかと思ったらちょうど少女が開いているのが、男女が睦み合っている濡れ場で、夜釣はそういう本を所持していたことで何か申し開きをしようとしているらしかった。少女はすでに男女のもっと濃厚な濡れ場を見慣れてしまっているのも何とも思わなかったが、夜釣はそんなことは知らないから、少女に不潔な男だと思われるのを恐れているのだろう。そう思うとおかしくなったが、逆に自分がそんな本をしげしげと見ていると思われるのも困ると思った。

「言い訳はいいから。わたしはじいさんの手がかりが見つければそれでいい」

何の気なしに口にしたのだが、夜釣はひどく傷ついた顔をした。しまったと思ったがもう遅い。少女はそのまま見開いた本に手を乗せて神経を集中した。本の素材はやはり紙ではなく、あまりにもすべすべし過ぎていて紙のような凹凸が一切感じられなかった。

やがて浮かび上がったのは海蛇じいさんではなく、一人の女だった。

この時代の女ではない。遙か昔、滅んでしまった文明の残像だ。女は薄い衣服を身に着け、褐色の液体を飲んでいて。それはコーヒー牛乳という名のものだということを少女は知っている。前から知っていたのかもしれないし、いま本に触れてわかったのかもしれない。とにかくそれはコーヒー牛乳と呼ばれるもので、牛の乳に、コーヒーという刺激の強い液体を混ぜた飲み物だった。

コーヒーとは、コーヒーの木の種子を空煎りして湯に溶かし出した真っ黒な液体で、これに牛乳を混ぜるとちょうど泥水のような色合いになる。甘い味を付けた飲料は意外に口当たりが優しく子どもにも喜ばれるものようだった。残像の中の女は湯から上がったところのようで、片手を腰に当て、片手にコーヒー牛乳の入ったガラス瓶を持ち、ごくり、ごくり、とうまそうに飲んでいる。

海蛇じいさんの気配は全く感じ取れなかった。夜釣が春画を見てどんな反応をしたかは生々しく感じ取れたが、じいさんを探す役には立たないので無視した。少女は考えた。この本がこんなに綺麗な形でここにあるのはおかしい。女の残像も鮮明すぎる。その時代の本がいきなりここにやってきたような鮮かさだ。この本は今の時代のこの場所にあるべきではない。あるはずのないものがここにある。

「コーヒー牛乳を飲む女の正体を調べなきゃ」

「えっ？」

夜釣がびっくりしたような声を出したが、少女は構わずに続けた。

「何かおかしいことが起こっている。じいさんがこの本をどうやって手に入れたか、それが問題よ」

（「コーヒー牛乳を飲む女の正体」 ordered by 蒼いオオカミ。 -san/text by TAKASHINA, Tsunehiro a.k.a.hiro）

## 新作スタート。お題募集中。

---

2011年10月1日。

Sudden Fiction Projectの新作発表が始まりました。

1日1篇ペースをめざしていますが、これはどうなるかわかりません。  
毎日、その日のお題を見て、いきなり書き始めていきなり書き終わる。  
即興的に書くSudden Fictionをこれからお楽しみください。

お題募集中です。

「[急募！お題](#)」のコメント欄で受け付けています。  
どなたでも気軽にご注文ください。初めての人、大歓迎です。

(お題の管理上、TwitterやFacebookでは見逃しがちなので、  
どうか上記コメント欄をご利用ください)

それではこれからしばらく新作のシーズンをお楽しみください。

※発表済みの作品をご覧になりたい方は  
「[SFPインデックス \(ただいま作成中\)](#)」  
をご活用ください。

あるはずのないもの[SFP0357]

<http://p.booklog.jp/book/47557>

著者 : hirotakashina

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/hirotakashina/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/47557>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/47557>

公開中のSudden Fiction Project作品一覧

<http://p.booklog.jp/users/hirotakashina>

電子書籍プラットフォーム : ブクログのパー ( <http://p.booklog.jp/> )

運営会社 : 株式会社paperboy&co.